

詳細

(1)～(7)、(9)～(11)割愛

(8) グループ8（報告者：幸 浩子／本田 一明）

1) 参加者(95名のうち)

- ・ 学生：9名
- ・ シニア：幸 浩子、本田 一明

2) 主な対話内容

- ・ 本班では、学生の課題（事前質問）に対して分担して対応するのではなく、両名のシニアが9名全員の質問に対して共通に回答する形式を取った。この方法により、全員の関心が共有される中で、班としての共通論点が浮かび上がった。
- ・ 学生の質問に対する回答を通して、単純な Yes/No で応答可能なものや、数値・データにより説明可能な問いだけでなく、それらの形式では答えるべきではない、または答えられないような貴重な論点も明らかとなった。9名の学生から提示されたこれらの論点として、以下の5つを選定した。
 1. 原子力発電に対する理解・周知（教育的観点）
 2. 発電のメカニズム、ライフサイクル、利点と欠点（エネルギーの基礎）
 3. 経験と知識の継承（教育的観点）
 4. 原子力技術の発展と日本が世界をリードするための課題（原子力および政策）
 5. 次世代原子力および原子力発電所の安全性（原子力安全）
- ・ これらの論点（対話テーマ）についての対話形式には「みゆカフェ方式」（注）を採用した。冒頭約15分間では、参加学生およびシニアの簡単な自己紹介と、当方式の説明、さらに前述の5つの論点について幸が概要を示し、本田が補足を加えた。
- ・ 前半の対話は、テーマごとに1～2名の学生が参加する形で始まり、シニアが挙げられた問題、疑問について解説していたが、次第に3つの小班（1・2・3班）へと自然に移行し、各班3名ずつがより深く議論を展開し、意見交換することとなった。
- ・ 全9名の学生に等しく興味ある内容を届けるのは容易ではないが、一般に言われる「1/3は興味を持ち、1/3は聞き、1/3は聞いているふり」といった構造も、対話後半では明らかに変化が見られた。各テーマに関心を持つ学生が自然に集まったことで、シニアの語りかけが確実に届く場となっていた。学生側からの質問、提案、確認等が多く寄せられ、双方向的な対話が成立していた点は特筆に値する。
- ・ 対話の最終段階では、全参加者が協力して5班分の討議内容をポスターにまとめ、発表を行った。討議内容のみならず、どのように議論を進めたかというプロセスについても共有され、各自が自発的に発言する姿勢が見られた。中には、自ら発表を希望する学生も複数おり、本対話が学生一人ひとりの内発的な関心と関与を喚起したことが確認された。

（注）【みゆカフェについて】

みゆカフェとは、特定のテーマに対して、参加者がポスター用紙に自由に意見や疑問、連想される考えや言葉などを同時に書き込み、それらに対して他者が連鎖的に反応しながら、対話と思考を深めていく対話促進型の学習手法です。一般的な討議方法；挙手して発言を求める方法とは異なり、全員が同時進行で発言できたり意見を知って考えを深めたりできる事は特筆すべきことと考えます。

発言が苦手な参加者でも書くことで意見を表明できるよう工夫されており、記述された考えが可視化されることで、参加者同士の気づきや共感、さらなる問いが自然に生まれます。特定の正解や結論、合意形成を目指すのではなく、多様な視点や考え方を尊重し合いながら、自由な思考の展開と対話の循環を重視します。

ここで挙げられた意見や疑問に対してシニアが解説・説明・問いかけを行うことで、双方向の納得性の高い対話が実現されます。限られた対話時間の中では、各テーマに対する予備知識を持ってもらうこ

とが効果的であり、本対話会のような事前質問への回答も有効でした。これにより、学生がより深い対話を展開できる準備が整えられていました。

みゆカフェは、学年や専門性を問わず自発的な参加を促す仕掛けとして有効であり、他者との協働を通じて「考える力」を育む点に大きな特徴があります。議論を深めることも重要ですが、「考え続ける」姿勢を重視することが基本にあります。

みゆカフェ 活動の様子（発表 と 作成したポスター）

